

書 評

月本 洋・上原 泉 著

想像 心と身体の接点

ナカニシヤ出版

ISBN 4-88848-820-7

2003年発行

評者：京都大学 楠見 孝



本書は、想像をめぐる言語と身体、さらにその発達の問題を、脳科学、言語学、心理学の最近の研究動向に基づいて探求し、オリジナルな理論の提唱と心理実験に基づく考察を行ったものである。本書は、2部構成であり、第1部の「想像と言語：身体運動意味論」を人工知能学者の月本が、第2部の「発達：記憶、心の理解に重点をおいて」を若手心理学者の上原が担当している。

プロローグ(1章)では月本が、「想像」を「イメージを心の中の像とし、そのイメージを作り出す活動」と定義して、非侵襲計測による脳科学の知見に基づいて、「想像が仮想的身体運動である」ことを述べ、続く第1部「言語と意味について」(2章)において、モデル意味論、記号論、認知意味論などを位置付けている。そして、「人は言葉をどのように理解しているか：理解の二重性」(3章)として、記号操作可能性と想像可能性を示し、前者が後者に基づいていることから「言語理解にはイメージが必要である」と仮定し、「身体運動意味論」(4章)として、「言語の意味とは(その語によって惹き起こされる)仮想的身体運動」であるとする新たなパラダイムを提唱し、メタファや命題論理の分析に適用している。そして、「いくつかの哲学的な議論」(5章)として、心身問題、動物や機械の想像力に関する議論を展開している。

2部では、上原が心理実験に基づいて、認知発達における想像の問題に関して考察している。「乳児期における心の発達」(6章)では身体理解さらに心の理解の発達が想像活動と結びついていることを示し、「記憶の発達」(7章)では、意識の視点から、再認からエピソード記憶にいたる発達と想像活動の変化を説明している。

さらに「コミュニケーションの発達」(8章)ではごっこ遊びや会話などの他者との身体的さらに言語的やりとりのなかで、想像活動が発達することを述べている。とりわけ、4歳前後の子供たちの認知の諸側面における縦断的な実証データに基づく検討は大変貴重な内容である。

エピローグ「人類の想像力の変容」(9章)では、月本が想像と言語の関係を進化論的観点から考察し、仮想現実装置の発達によって「想像力が衰退する可能性が大きいと考えられる」と述べている。しかし、実証は今後の課題である。私の心配は、2歳半の息子が、電車好きで子ども用の乗り物ビデオを毎日見ていることである(私が子どもの頃は同じ絵本を何度も見たものだ)。ビデオやテレビゲーム、インターネットなどが提供する仮想世界が、想像力を衰退させるのか拡張させるのかを進化的に検討するには長い年月が必要である。しかし、第2部でも取り上げている発達の影響であれば、縦断や横断調査によって検討が進められており、バーチャルリアリティ研究者にとっても、重要なテーマであると考えられる。

本書は、バーチャルリアリティの研究者が、想像力と言語の問題を捉えなおし、仮想世界が人の想像力に及ぼす影響を考える上で、非常に重要な専門書であると考えられる。